

小児科・病原体定点医療機関における 病原体サーベイランス検査結果(2025年)

当所では、感染症法に基づく感染症発生動向調査事業の一環として、病原体の検出を行っています。細菌担当では、市内5か所の小児科定点医療機関から送付された細菌検査検体について、主にA群溶血性レンサ球菌咽頭炎および感染性胃腸炎に関する検査を実施しています。

また、2025年4月より、国内で流行している呼吸器感染症の把握を目的として、急性呼吸器感染症(ARI)サーベイランスが開始されました。ARI細菌検査の実施を希望された検体については、国内でしばしば流行が見られるA群溶血性レンサ球菌、百日咳菌および肺炎マイコプラズマの検査を実施しています。

本報告では、これらの検査対象のうち、特に小児で発生頻度の高いA群溶血性レンサ球菌咽頭炎および感染性胃腸炎について取り上げます。A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は、ランスフィールドの分類でA群に分類されるレンサ球菌による咽頭炎であり、小児では発赤、高熱、発疹を伴う咽頭炎を呈し、重症化すると猩紅熱や、続発症として急性糸球体腎炎、リウマチ熱などを発症することがあります。感染性胃腸炎は、細菌やウイルスなどによって引き起こされ、嘔吐や下痢などを主症状とする感染症です。原因としてはノロウイルスやロタウイルスが主ですが、細菌性のもも含まれます。

今回は、2025年1月から12月までの1年間に、小児科・病原体定点医療機関から受け入れた検体について、A群溶血性レンサ球菌および感染性胃腸炎の検査結果を報告します。

(1) A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

患者の咽頭ぬぐい液83検体から分離されたA群溶血性レンサ球菌61株のT型別*の結果を表に示しました。市内では、T4型が最も多く42株(68.9%)、次いでTB3264型が5株(8.2%)分離されました。これらの結果は、衛生微生物技術協議会溶血性レンサ球菌レファレンスセンターに報告しており、全国のデータとして取りまとめられ、国立感染症研究所のホームページで公表されます¹⁾。

(2) 感染性胃腸炎

感染性胃腸炎の細菌検査は4検体に対して実施し、*Campylobacter jejuni* が1検体、*Campylobacter coli* が1検体、*Staphylococcus aureus*(エンテロトキシンA産生)が1検体から分離されました。

表 病原体サーベイランス検体から分離されたA群溶血性レンサ球菌のT型別結果

菌型	T1	T4	T12	T28	TB3264	型別不能	計
2025年1～12月	1	42	2	3	5	8	61

* T型別とは、A群溶血性レンサ球菌の菌体表層に存在するT蛋白の血清型別のことで、疫学調査の手段として広く用いられています。

¹⁾ 衛生微生物技術協議会第45回研究会(北海道)レファレンスセンター等報告

https://www.niid.jhs.go.jp/basicresearch/laboratory-test/reference/R7_Streptococcus.pdf